

ワールドカップ 1988—国際会議の舞台裏—(8)

今野 浩（中央大学）

15. 大事件発生

中日を迎えて、実行委員の間には疲労感に混じって、安堵感が漂い始めた。これまでのところ、大きな問題は起らなかつたし、参加者数も概ね目標に到達した。有料登録者数は668人だが、35人の招待客を加えれば700人の大台を超える。

また、東大・東工大・慶應・早稲田・東京理科大などから動員した、2ダース余りのアルバイト学生を準招待客とカウントすれば730人に達する。これらの大学生は、2日目の午後以降は、アルバイト代をもらった上に、ワールドカップ'88をタダで観戦できるラッキーな人達である。

この中から近い将来、世界に翔くプレーヤーが出現することを期待しよう（この期待が裏切られることはなかった。世界のエース・プレーヤーをナマで見た人たちの中から、1ダースを超える一流プレーヤーが育つのである）。

今晚予定されている晩さん会が終われば、残るは実質木曜1日だけである。そして金曜朝の、名もなき研究者による“エンプティー・セッション”が終ったあとは、午後の閉会式でモントリオール以来の、9年にわたるドラマに幕が下りる。

金曜の夜には会長招宴があるが、これはすべて実行委員長にお任せだから、私が心配することはない。

こんなところにかかってきたのが、神田警察署からの電話である。お茶の水の「ホテルジュラク」に宿泊しているジェロスロー氏と覚しきアメリカ人が、浴室で死体になって発見されたので、至急誰か来てほしいという。油断していたところに、大事件発生である。

滅多にない名前だから、これはジョージア工科大学のロバート・ジェロスロー教授に違いない。この人は私と同年輩の数学者で、70年代はじめにカーネギー・メロン大学を訪れた際に、エゴン・バラス教授から紹介されて以来、あちこちの研究集会で顔を合わせれば、挨拶を交わす程度の間柄だった。

バラス・グループの後追いをしていた時代に、この人が書いた論文を何編か読んだことがあるが、数学に強いバラス軍団の中でも、最も高級な数学を操る人だった。

ネムハウザー教授がモントリオールで、「悪しきORの見本」と断定したカーネギー・メロン・グループの中でも、最も実用から遠い研究をやっていた人である。

したがって数年後にこの人が、カーネギー・メロンからジョージア工科大学に移ったときには、ネムハウザー教授の予想が当たったと思ったものだが、その数年後にネムハウザー教授自身が、寒冷地イサカから、“1年中テニスができる”ジョージア工科大学に移籍して同僚になるのだから、世の中は分からぬものである。

タクシーでホテルに駆けつけると、入口の前に赤いランプを点灯させた2台のパトカーが止まっていた。

フロントで名前を告げると、係員が私を3階に案内した。エレベータ・ホールの右側にはロープが張られ、2人の警官が立っていた。再び名前を告げると、警官が死体の身元を確認してくれないかと言う。

部屋の床には、シーツを被せた死体が横たえられていた。警官がシーツをめくると、紫色にはれ上がった顔が見えた。ジェロスロー氏かと尋ねられ、良く分からぬと答えると、誰か身元確認ができる人はいないかと言う。ユニーク・ソリューションは、同僚のネムハウザー教授である。

この人は、コカコーラ社の寄付金をもとに設立された冠講座の教授として剛腕を揮い、実用研究のチャンピオンとして名声を高めていた。バリンスキ教授に替わって、国際数理計画法学会の次期会長に就任するのはこの人である。

現場責任者として、次期会長には丁重にご挨拶させていただいたが、依然として友人になりたい人ではなかつた。そこで伊理・刀根両教授に対応をお任せしておいたのだが、この際この人に頼むしかない。

そこで私は、シンポジウムの受付カウンターに電話して、ネムハウザー教授を呼び出してもらうよう依頼した。

ホテル側の説明によれば、ジェロスロー教授は朝早くホテル周辺を30分ほどジョギングしたあと、軽い朝食を取ったが、そのときは別段変わった様子はなかったという。

ところが10時過ぎに、メイドがベッドメイキングのために部屋に入ったところ、便座から転げ落ちて頭が水を張った浴槽につかっていたが、発見したときはもう心臓は停止していたということだ。

医師の診断では、心臓発作による病死で、事件性はないということだ。殺人事件でなくて良かったと思っているところに、ネムハウザー教授が到着し、すぐさま本人であることを確認した。死体を見ても全く動じないのはさすがだ。

これで一件落着かと思ったが、そうは問屋が下ろさなかつた。警察としては家族と連絡を取り、死体を引き取ってもらわなくてはならない。

ところがネムハウザー教授によれば、ジェロスロー教授は1年ほど前に離婚し、現在はガール・フレンドと同棲中だという。

前夫人に連絡すると、きっぱり死体の引き取りを拒否。ではガール・フレンドはどうかといえば、婚姻関係を結んでいないので、引き取る権利がない。近所に母親が住んでいるということだが、病気療養中で引き取りに来ることはできない。兄弟は1人もいない。

引き取り権があつて連絡が取れる人は、前夫人と一緒に住んでいる1人息子の中学生だけである。

そこで自宅に電話して、ガール・フレンドに事情を説明すると、息子に付き添っていく用意はあるが、前妻との交渉はこちらでやってくれという。

ネムハウザー教授がかけまくる電話の内容を聞き取り、警官に通訳するのは私である。

国際電話料金は、ひとごとに比べて随分安くなつたといふものの、これだけかけると1万や2万では済まないだろう。この料金は誰が負担するのかと思ったが、その後電話代とはケタ違いの費用が発生することが分かった。

デルタ航空に遺体搬送について問い合わせると、一等料金2人分くらいかかるといふ。大きな柩は優に2人分のスペースが必要だし、隣に一般客を乗せるわけにはいかないからだろう。

アトランタ東京の片道一等料金は、40~50万は

する。ガール・フレンドと息子の一等料金を併せれば、200万近い出費だ。誰がこの費用を負担したのかは知らない。しかし、実行委員会でなかつたことは確かである。

気がつけば4時を回っていた。実行委員には理由も告げずに出でてきたから、心配しているだろう。この際、あとのことはネムハウザー教授に任せた方が賢明だ。

結局私は、5時間近くこの人と付き合つたわけだが、その交渉力と判断の的確さに舌を巻いた。もしこの人が弁護士になっていれば、凶悪犯でも無罪にしてくれるだろう。

友達にはなりたくないが、警察との対応に当たつては誠に頼もしい人だった。この人がいなければ、すべての交渉を私が引き受けことになったことを思うと、不幸中の幸いというべきだろう。

この事件で私が得た教訓は、“外国出張中に死んではいけない”ということである。ついでに言えば、“中年男は離婚しない（されない）こと、不要不急の海外出張はしないこと、出張先でジョギングなど、リスクのある活動はしないこと”である。

700人×1週間となると、いろいろなことが起こるものだ。実はこの前夜にも、あわやという事件があった。

夜10時過ぎにX教授から電話があり、この人がホストしているカナダ人A氏から、「これからホテルの窓から飛び降りるつもりだが、止めてくれるな」という電話がかかってきたので、これから止めに行く。間に合うかどうか分からぬが、とりあえず連絡しておいた方がいいと思ったので電話したという。

実はこの天才カナダ人は、以前から死にたい症候群にかかっていて、過去にもこのようなことがあつたらしい。

A氏には、「止めてくれるななどと電話をかけずに、勝手に飛び降りてくれ」と、またX教授には、「連絡するのは、飛び降りてからにして下さい」と言いたい。

結局X教授は、一晩中A教授に付き合つて説得にあたり、翌日カナダ行きの飛行機に乗せて事なきを得た。

A氏は20年後の今も御健在のようだが、このあと何回このような騒ぎを起こしたのだろうか。A氏には重ねて言いたい。「飛び下りるなら、（日本ではなく）カナダにして下さいね」と。

細かいトラブルを書き出せばきりない。例えば身長198センチの大男のベッドを巡る、ホテルとの交渉

(一泊 6,000 円のホテルに、巨人用ベッドはない). 結局 2 つのベッドを並べて、斜めに寝てもらった.

相撲部屋を見学しに行ったアメリカ人が、土足で土俵に上がりこんで、親方から大目玉を食らった事件. カーマーカーが AT & T の同僚と、研究成果の帰属をめぐって口論になった事件、などなど.

しかしこれらの事件は、ジェロスロー教授事件と次に書く椿山荘事件に比べれば、御愛嬌である.

16. 椿山荘事件

面白にある椿山荘といえば、東京でも有数の高級レストランである。都心にあるにもかかわらず、2 万坪の日本庭園を擁し、その中を流れる清流には蛍が舞うという。

バブル最盛期のこの時代、賓客をここで接待するには、1 人当たり 2 万円を覚悟する必要があった。ドルに換算すれば 150 ドルだから、ディナーをめぐって 14 ドルか 16 ドルで揉めるアメリカ人にとっては、目を剥くような値段である。

ところがこの高級レストランが、1 人 1 万円で、山海の珍味を腹一杯食べさせてくれるというのである。はじめてこの話を聞いたとき、私は“まさか”と思ったものだ。

1 万円で利益を出すには、料理の質を落とすか量を減らすしかない。しかし椿山荘にコネがある S 教授によれば、先方は最後まで皿が空にならないことを約束してくれたということだ。

70 ドルで、日本一のレストランの高級料理がたらふく食べられる——。この噂は外国人（特にアメリカ人）の間に広がり、200 枚のチケットは早々と売り切れた。受付わきのメッセージ・ボードには、“晩餐会チケット求む。100 ドル” という張り紙が出るほどの人気である。

何枚か追加チケットを用意したが、これもあつという間に売り切れた。かくして宴会場は、250 人のキャパシティーを超える客で溢れ返った。

大宴会場の中央には、大きなテーブルが 3 つ 4 つ置かれている。壁際には、スシ・テンプラ・ソバ・おでんなどの和食と、ローストビーフ・松坂牛のステーキなどの屋台が並ぶ。晩餐会の進行役を務めるのは、アメリカから戻って一橋大学助教授に迎えられた金子郁容氏である。

この人は、スタンフォード大学で博士号を取ったあと、ウィスコンシン大学の経営工学科に迎えられ、2

年連続して「The Best Teacher of the Year」に選ばれたというほどの英語使いである。

日本にも英語が上手な人はたくさんいるが、私が知る限りでこの人より上手な人は、大蔵省財務官を務めた「ミスター円」こと、榎原英資氏くらいのものである。

パーティー通の友人によれば、会場には早目に到着して、スピーチの間に目玉料理を品定めし、ヨーイドンがあったところで、狙った獲物を素早く手に入れ、ジャンク・フードには手に出さずに、早目に退散するのがこつだという。

しかしそこには、紳士としての暗黙のルールがある。例えば、伊勢海老 3 匹と大トロ寿司 8 貫に手を出すようなことはしない。そもそも一流の人が集まるパーティーでは、中学生のようにガツガツ食べる人はまずいない。

ところが会場を埋めた外国人の中には、朝・昼抜きでやってきた人が大勢いた。先にも書いたとおり、アメリカでは 70 ドルといえば家族 4 人の 1 週間分の食費に相当する大金である。15 ドル程度で揉める人が、70 ドルも出すからには、目一杯食べなければ生涯の痛恨事である。

彼らは他人のスピーチなど全く聞かずに、いつ「食べ方始め」の合図があるかを、しごれを切らして待っている。スシと松坂牛ステーキの屋台の周りには、すでに多くの外国人がにじり寄っている。

司会者の、「皆様、これから日本最高の料理をお楽しみ下さい」の言葉が終わる前に、屋台に飛びつき、握り立ての寿司 2 皿と、ステーキとローストビーフをそれぞれ 1 皿、合計 4 つの皿を、ウェイターのごとく器用に持ち運ぶ Z 教授。また W 教授は、寿司を 3 皿とステーキ 1 皿。

かくして寿司とステーキは早々と売り切れ、中央テーブルのお刺身やロブスターも、誰かの腹の中に納まってしまった。

バリンスキー会長は、「最初にジャンク・フードで腹を膨らませておいて、いい料理はあとから出せばいいのに」と耳打ちしてくれたが、時すでに遅し。結局私は全く何も食べないうちに、高級料理の皿は空になった。

「数理計画法の父」は、料理に群がる人たちを見て、「They are like birds」という言葉を発したが、“big hungry birds”は中央テーブルの料理も空にした。まだおでんやソバは残っているが、このまま終わらせる

わけにはいかない。

そこで、「最後まで皿が空にならないと約束したはずだ」とマネージャーに詰め寄ったところ、フライド・チキンとパスタが出てきた。しかしそれもたちまち空となる。マネージャーは、「こんな客は見たことがない」とのたまう。

そこで仕方なくアルバイト学生に、ポテトチップなどのジャンクフードを買いに行ってもらい、その場を凌いだが、ここに集まった人は椿山荘の記録を塗り替えた、歴史的鳥人集団だったのだ。

“夫人同伴でないアメリカ人はお行儀が悪い”ということを熟知していたのに、“椿山荘バンケット”という企画に待ったをかけなかったのは、私の大失態である。

しかし腑に落ちないのは、パスタとフライド・チキンの皿が空になったあと、マネージャーが、「厨房にはこれ以上何もありません。何なら地下の冷蔵庫をご覧になって下さい」と言ったことだ。

大レストランの冷蔵庫とは、その程度のものなのか？ 業界事情に詳しい人に尋ねたところ、そんなことは絶対にあり得ないと言っていた。

では高級料理のすべてが、外国からやってきた鳥人集団の餌食になったのかといえば、そうでもないらしい。アルバイト大学院生たちは、かなりの量の寿司やステーキを“無錢”飲食したようだ。日本人学生も、立派な鳥人だったということである。

食事騒動が一段落したところで、アトラクションが始まった。まずは美人姉妹のハープ演奏。しかしカルチャーのない鳥人にとっては、“鳥にハープ”である。食べものがなくなった以上長居は無用と思ったのか、かなりの鳥人は姿を消し、会場はやや静かになった。

ここに始まったのが和太鼓実演。ところがこれがうるさいのなんのって。マーラーの「一千人の交響曲」に匹敵する轟音である。室内での和太鼓15分は、轟音煉獄だった。毎晩太鼓を叩いている人の耳は、どうなっているのだろう。

轟音が終わると、重要人物のスピーチが始まった。金子氏の洗練された司会ぶりに、会場のアメリカ人から、「あの男は誰だ」という感嘆の声が上がったくらいである。

金子氏は英語だけでなく、数理計画法でもわが国を

代表するエースだった。ところがこの人は、このあと間もなく数理計画法とは縁を切り、全く別の世界にトラバユしてしまうのである。

パーティーを締め括ったのは、次期学会長のジョージ・ネムハウザー教授である。数時間前のジェロスロー事件での大奮闘の疲れも見せない、堂々たるスピーチだった。

“椿山荘事件”は、シンポジウムの裏方を務める私にとって、MITの“バーベキュー事件”にも匹敵する不祥事だった。

「2週間分の食費を払ったのに、この食い物は何だ」、「実行委員会は、これで資金不足を穴埋めしようとしたのではないか」。こんなことを言われたら、ディキン招致で獲得した得点が吹き飛んでしまう。

しかしこれは杞憂だった。100羽のアメリカ鳥が、200人分の御馳走を食べてしまったら、残りの150人には、50人分（プラス追加した分）しか残らなかつたかもしれない。

ありがたいことにこれらの人々は、食べるためには集まつわけではない紳士だった。これらの人々は少しばかりの高級日本料理を味わい、美人姉妹のハープ演奏に目を奪われたあと、和太鼓で耳を塞ぎ、日本庭園と螢の光を堪能したのである。

一方、70ドルを払わなかつた人が文句をつける筋合いはない。かくして、実行委員会を批判する声は、どこからも聞こえてこなかつたのである。

4つの皿を見事に操ったW教授が、今でも顔を合わせるたびに親指を立てて、「Chinzanso was excellent」と言ってくれるのは、このシンポジウムで私が手にした苦い勲章である。

いよいよこの連載も次回で最終回を迎える。読者の中には、筆者の“格調低い”文章が、学会誌という公器を汚すことによって、不快感を覚えられた方もおられたようである。

しかし、ひとたび始めた連載を途中で中止すれば、前例のない“事件”として語り継がれることになるだろう。そこでこの連載の趣旨を説明した上で、なるべく格調の低い表現を慎むことで御了解をいただいた。御不快感を抱かれた方々には、ここでお詫び申し上げる次第である。